

崩壊と再生
——古代アンデス諸社会の事例——

渡部 森哉

キーワード

崩壊、再生、複雑社会、国家、アンデス

1. はじめに

考古学において研究対象となる遺跡は、過去の人間の活動の場であり、そして人間によって放棄された結果である。従って、遺跡を扱うこと自体が、何らかの形で「終わり」に関係することになる。

考古学者は各遺跡、各地域で編年を確立することに腐心する。時期区分をするという手続きは、大きな変化が生じたところで時期の名称を変えることであり、また逆に共通する特徴が認められる時期を一括りにすることである。時期区分の境界は、新しい時代の始まりであり、また古い時代の終わりでもある。

本論文の目的は、ある時代が終わり、そしてある時代が始まるという解釈、語り方について、考古学データを基に考察することにある。特に「複雑な」社会が衰退、あるいは崩壊したという解釈について考えてみたい。例えば国家の成立など、比較的シンプルな社会から複雑な社会への変化は、しばしば進化、発展と読み替えられ、その移行のメカニズムについては議論が積み重ねられてきた (cf. Carneiro 1970)。また、そうした複雑な社会が終焉を迎える、あるいは崩壊する理由についても、個別事例を対象として論じられてきた (cf. Yoffee & Cowgill [eds.] 1988)。本論文では、個別の社会、政体の崩壊や衰退の要因を議論するのではなく、そうした現象をより長期的タイムスパンの中に位置づけて考察する。事例として、先スペイン期アンデスの諸社会を取り上げる。

2. 考古学における崩壊に関する研究史

考古学では一般に何かの始まり、成立を議論することが好まれる一方、終わりについてはかつてそれほど注意が払われてこなかった。特に、シンプルな社会の終わりは、より複雑な社会への移行に還元されてきた。

複雑な社会や国家の「崩壊」というテーマについては、1988年に2冊の重要な本が出版された (Tainter 1988; Yoffee & Cowgill [eds.] 1988)。これら2冊の著作は、複雑社会の崩壊に関する体系的な研究を行い、崩壊の後何が起こったのかについても考察した。それらはあくまで社会の崩壊の要因を、整合的に説明しようとする試みであった。

ジョゼフ・A・タインターは『複雑社会の崩壊』(Tainter 1988)において崩壊を「確立したレベルの社会的・政治的・経済的複雑性の急速な喪失」(Tainter 1988: 4)と定義し、世界各地の事例を網羅的に扱い、崩壊のパターンを抽出しようとした。

ノーマン・ヨフィーとジョージ・コーギルの編著『古代国家・文明の崩壊』(Yoffee & Cowgill [eds.] 1988)は、トインビーやシュペングラのモデルを参照枠として用い、生物学や社会生物学のモデル、システム理論を準拠枠として援用し、古代国家の崩壊の要因として例えば具体的に環境破壊などを取り上げた。ただしヨフィーは生物の変化と社会変化を同じ理論では説明できないとも述べており(Yoffee 1988: 8)、その他の論文も結論で単独の要因に軍配を上げるのではなく、「共同作用の結果 (synergistic result)」であるとする、つまり複合的な要因を取り上げる傾向が強かった。

この本に所収された論考の中で、その後の研究に特に重要なのは社会学者シュメル・N・アイゼンシュタットの論文である。彼は社会の「境界 (boundary)」を議論の対象として挙げ、「崩壊は社会的政治的システムの境界の再構造化の極端なケースに過ぎない」(Eisenstadt 1988: 237)と述べた。つまり問題は崩壊かどうかではなく、社会の境界がどのように再構造化され再構成されるかであるという。この考え方に従えば、崩壊はそれまでの境界が弱まる現象として説明できるし、逆に境界が強まる場合は、政体が活性化するときであると解釈できる。そして崩壊は「反システム (antisystems)」の助長と連動すると説明できるとする(Eisenstadt 1988: 241)。問題は、崩壊の後に再生可能なのか、あるいは崩壊は不可逆的な現象なのかである(Eisenstadt 1988: 242)。

考古学では社会・文化の境界を、様式 (style) といった概念によって設定しようとしてきた (cf. Conkey 1990; Hegmon 1992, 1998)。物質文化を基に検証し議論を進めることができるため、境界という概念は考古学と親和性が高い (cf. Dietler & Herbich 1998; Stark 1998)。

その後、21世紀に入り、『崩壊の後に—複雑社会の再生』(Schwartz & Nichols [eds.] 2006)、『崩壊を問う—人類のレジリエンス、生態的脆弱性、帝国直後』(McAnany & Yoffee [eds.] 2010)という2冊の論集が編まれた。

タイトルが示すように、2006年の『崩壊の後に』は、崩壊を終わりとして捉えるのではなく、その後何が生じたのかを問題にし、さらに複雑な社会がどのように再生するかに着目した。崩壊は「国家のより小規模な政治体への分裂、都市センターの部分的あるいは完全な放棄、および中央集権的機能の喪失・減少、地域的経済システムの衰退、文明イデオロギーの失敗」と定義され、また、「崩壊によって人間集団、あるいは大伝統が完全に消滅することはまれである」とまとめられた(Schwartz 2006: 5-6)。さらに、アイゼンシュタットの1988年の議論を受け、「境界の再構成 (boundary reconstruction)」の1つが複雑社会の再生であり、周縁であった地域や二次的エリートが次の再生の主体となることや、長距離交易が指標の1つとなることが示された。またイデオロギーが再生の際のポイントであり、「なぜ過去が想起され、過去の一部が強調され、他の部分は忘却されるのか？」(Yoffee 2006: 227)という問題提起がなされた。

1 タインター (Tainter 2006: 33) はその後、この定義は不十分であったと振り返っている。「急速な」とはどの程度なのか、「確立したレベル」とはどのレベルなのかなど、議論すべき部分は多いという。

2010年の『崩壊を問う』は、2005年に出版されたジャレド・ダイヤモンドの『文明崩壊』に対する反論として編集された（ダイヤモンド 2012[2005]）。その論点の1つが「人間のレジリエンス（human resilience）」であった。レジリエンスについての議論は、他の分野でも行われているが、考古学においても継承されていった。

2016年には『崩壊を越えて』（Faulseit [ed.] 2016）という本が編集され、レジリエンスという考え方が検証された。編者であるロナルド・K・ファオルザイトは、崩壊がレジリエンスと対置されてきたことを問題視し、両者は同一現象の一部と主張する（Faulseit 2016: 4）。そして崩壊、社会変容、レジリエンスという関連する概念を次のように整理している。

崩壊と見なされるのは、社会政治的複雑性の急速な衰退、あるいは特定の政治システムの消滅、特定の政治装置の分裂・分断である。

社会変容は「崩壊」という言葉を用いることに抵抗がある研究者が、対案として提示している用語である。人間は問題に対して実に多様な仕方に対応をするのであり、社会変容は移行期の社会の結果全てに関連する概念である。つまり崩壊だけでなく、再編成、再生なども包摂する。

レジリエンスは近年用いられるようになった用語であるが、ストレスに対する脆弱性あるいはそれに対応する能力を大まかに指している²。しかし考古学においては大きく2つの使用法があり、混乱している。1つは「何か問題が起こったときに、望ましい状態を維持する、回復する能力」という意味で、もう1つは「社会政治的複雑性が減少した文明において、世界観や親族関係言語などの文化要素を維持すること」という意味で用いられる。換言すれば前者は政治的レジリエンス、後者は文化的レジリエンスであり、両者はしばしば齟齬を来す。

ファオルザイトは、考古学者が複雑社会の崩壊を単独の要因に帰する議論を避けていたことを認めつつ、崩壊を含む社会変容をより包括的に理解するために提示されてきたモデルを概観し、その一方で、多様性に注目する研究者が、社会的政治的単位の独自の歴史的軌跡を強調することを指摘する。彼はこうした多様性（個別性）に注目した議論の枠組みが、社会変容を考察する際にも示唆に富むという。例えば、エージェンシーに注目する場合、社会構造が境界を設定する一方で、そこに含まれる主体（個人あるいは集団）がそうした境界を再構造化するよう交渉するという双方向的な枠組みが設定されるが、エージェンシーを用いたモデルを社会変容に関するモデルと組み合わせることで、より有益になると提案する。また、エージェンシーという概念は「出来事の考古学（eventful archaeology）」（Beck *et al.* 2007）という考えと類似することを指摘する。

以上のように、現在は1980年代からの問題意識を継承しつつ、崩壊にまつわるテーマを設定し、既存の問題設定を精緻化し、そこから理論的枠組みが生まれてきた段階にあると言える。

次節からアンデス地域の諸事例を基に崩壊について考察していくが、その際に有益なのはタインターの指摘である。1988年の著作から28年後の2016年の論文集に寄せた論考において、タインターは「崩壊」という概念が暗黙的に、複雑性をプラスと捉え、何か望ま

² 社会のレジリエンスの特徴として、取り組む能力（coping capacities）、適応の能力（adaptive capacities）、変容の能力（transformative capacities）の3つが挙げられる（Keck & Sakdapolrak 2013:10）。

しいものを失うという意味で用いられていると指摘している (Tainter 2016)。つまり崩壊したのは何が悪かったのかという問いに繋がるが、そうではなく、社会の複雑性を変化させる要因は何かという問題設定の方が望ましいと主張する。複雑性は、余剰生産物などのエネルギーから生じるのではなく、複雑性とエネルギーは共に進行する関係であり、崩壊は負の側面ではなく、通常の過程であるという (Tainter 2016: 37)。そして崩壊に注目するのではなく、複雑性の増加、減少に関する問いに変換することで、崩壊と進歩を同じ土俵の上で評価することができるという。

崩壊は果たしてマイナスなのであろうか。タインターが指摘するように、これまでの議論では複雑性の度合いが高いほど良いものとする前提で議論がなされてきた。現在学問をしているのが複雑な文明社会に属する人々であることから、そのことは暗黙のうちに想定されている。ここではむしろ新しいものが生まれる前提条件として、崩壊のポジティブな面に注目したい。

考古学においては「大きな変化があった」、「ある社会、時代が終わり、別の時代が始まる」と解釈する時期、現象に着目されてきた。本論文では、「崩壊」という概念が適切かどうかという議論があることを認めつつ、なぜ崩壊したのかを問題にするのではなく、それが何を意味するのかに注目し、崩壊や再生という現象、そのメカニズムをより長いタイムスパンで考察する。ここで用いる崩壊とは、ある社会、例えば国家などの政治システムの崩壊のことを差しており、「文明の崩壊」ではない。そもそも文明は長期間にわたる現象を指すため、短期間の現象に注目し「崩壊」と表現することは不適切である。これはレジリエンスを、政治的レジリエンスと、文化的レジリエンスに分ける考え方と類似しており、政治的側面に注目すれば崩壊と見える現象も、文化的に見ると連続性を示すことがある。

2006、2010年の論集では、崩壊という概念の不適切さや、それを単独の現象として捉えることの不十分さが論じられた。ここでは議論の仕方をややずらして、崩壊かどうか、あるいは崩壊と呼ぶことが適切かを議論するのではなく、そうした現象が長期的に見てどのように位置づけられるのかについて、あくまで証拠に基づいた議論を進めたい。近年研究テーマとして取り上げられる「リスク」は、現在進行形、あるいは未来志向の概念であるが、「崩壊」は、すでに起こった過去の現象を扱う、歴史認識の概念である。

3. アンデスの編年

アンデス考古学では一般に、主に北米の研究者が用いる編年と、ペルー人研究者が好む編年の2つが使用されている。前者はアメリカ人研究者ジョン・H・ロウ (Rowe 1967[1966]) の提唱した編年であり、後者はペルー人考古学者ルイス・G・ルンブレラス (1977[1974]) の編年である。ロウの編年は、共通の図像・土器・建築様式が広範囲に認められる時期をホライズンという概念で捉え、前期ホライズン期、中期ホライズン期、後期ホライズン期の3つのホライズンを設定し、それぞれの間を前期中間期、後期中間期と呼ぶ³ (cf. Rowe & Menzel [eds.] 1967)。各時期の年代は少しずつ修正を加えられてきたが、現在一般的に用

³ ペルー南海岸のイカ川流域を基準として、同河川流域にチャビン文化の要素が現れてからを前期ホライズンとし、同様にワリ文化と中期ホライズン、インカ文化と後期ホライズンが結びつけられている。

いられる年代は大まかに次のようになる⁴。

先土器時代	前 11000-1800 年
草創期	前 1800-800 年
前期ホライズン	前 800-200 年 ⁵
前期中間期	前 200-後 700 年
中期ホライズン	後 700-1000 年
後期中間期	後 1000-1450 年
後期ホライズン	後 1450-1532 年

ルンブレラスの編年はより進化主義的な時期名称を用い、石期、古期、形成期、地方発展期、ワリ帝国期、地方国家期、インカ期と時期を区分する。ワリ帝国期、インカ帝国期はそれぞれワリ帝国、インカ帝国という政治組織が台頭した時期であり、ロウの編年の中期ホライズンと後期ホライズンに大まかに対応する。日本ではこのルンブレラスの編年の時期名称を用いることが多いが、その年代を少し修正して使用している。現在用いられる年代は次のようになる (cf. 関 2010[1997])。

石期	前 11000-5000 年
古期	前 5000-3000 年
形成期	前 3000-50 年
地方発展期	前 50 年-後 700 年
ワリ帝国期	後 700-1000 年
地方国家期	後 1000-1470 年
インカ帝国期	後 1470-1532 年

いずれの時期にも始まりがあり、終わりがある。考古学者は得てして何らかの始まりを論じがちであるが、今回は特定の時期の終わりに着目し、それが何を意味するのかを考察してみたい。それは形成期の終わり、国家の終焉の時期である。

4. アンデス形成期の終わり

形成期は大まかに文明が形成される時期と解釈され、現在では早期 (前 3000-1800 年)・前期 (前 1800-1200 年)・中期 (前 1200-800 年)・後期 (前 800-400 年)・末期 (前 400-50 年) の 5 期に細分される (加藤 1993; 加藤・関編 1998)。形成期には各地に神殿が建設さ

⁴ ジョン・リック等は前 800-400 年と考えている (Rick *et al.* 2010)。一方、ロウの弟子リチャード・バーガーは、前期ホライズンに大まかに対応するハナバリウ期の年代を前 700-300 年と考えている (Burger 2012: 154)。

⁵ ペルー南海岸のイカ川流域を基準とする場合、パラカス文化の終わりが前期ホライズン期の終わりに対応する (cf. Reindel & Isla 2015; Unkel *et al.* 2009; Unkel *et al.* 2007; Unkel *et al.* 2012)。

れ、神殿が社会統合の核となっていた。筆者はこの時期の社会を神殿社会と呼ぶことを提案している（渡部 2013）。

紀元前四千年紀に神殿、祭祀センターが建設され始め、アンデスでは社会の複雑化が進行していった。各神殿は更新され、大規模化した。が、いずれの神殿もある時点で放棄された。つまり本来の機能を果たさなくなったのである。新たに建設される神殿もあるため、大局的に見ればアンデス地域内で神殿建設の場所が移っていったと解釈できる。しかし、そうした神殿の場所の移動のみならず、神殿そのものが本質的に変容し、建設されない、あるいは更新されない時期が来る。それが紀元前 400-250 年頃であり、前期ホライズンの終わり、あるいは形成期後期の終わりに対応する⁶。前期ホライズン、あるいは形成期後期はチャビン・デ・ワントルをはじめとする諸神殿の広範なネットワークが確立された時代である（Burger 1992, 2012）。形成期後期の終わりの現象は、神殿社会の崩壊と捉えることができる。

約 3000 年間にもわたり神殿建設が継続されたアンデス形成期は安定した時代であったと言える。しかし逆に捉えると、社会が発展しなかった時代とも言える。形成期は神殿を中心として社会が統合されていた時代と説明されるが、それは国家という政治システムが出現する前の時代であり、形成期には、王と呼ばれるような政治的リーダーは存在しなかった。神官が儀礼を司り、それを示す物的装置、実施する舞台が神殿であった。

しかし、結局この神殿を中心とした社会は終わりを迎え、それをもって研究者は形成期の終わりとする。しかしこれまで形成期社会の終わりについてはあまり活発に議論されてこなかった。それは形成期の後に、国家社会が成立したため、そちらの方に議論の重点が置かれていたためである。形成期の終わりには何が起こったのか。自然災害か。社会的矛盾をイデオロギーで説明することに失敗したのか、あるいは信仰体系と折り合いをつけることができなかつたのか。それとも政治的権力の萌芽が認められ、宗教的職能者は力を失ったのか。

局地的に見ると、ペルー北海岸・中央海岸⁷では、ランバイエケ谷（Alva Meneses 2010, 2012）やネペーニャ谷（Shibata 2010, 2011, 2014）を除き、基壇型の神殿の多くが放棄されたのは形成期中期の終わりの前 800 年頃のことであり、山地よりも早い。海岸の諸神殿の放棄、衰退後、形成期後期の山地ではチャビン・デ・ワントルを中心としたネットワークが活発化していった。そして形成期後期の終わりには山地の神殿の多くがその機能を停止した。一方、ペルー北高地カハマルカ地方では、最後の最後まで、つまり形成期末期まで古い基壇型の神殿を作り続けた。ライソン遺跡などの建物がその例である（Kato & Seki 1985）。カハマルカ盆地においては形成期後期から形成期末期にかけて連続性が認められ、

⁶ 形成期末期はほとんどの地域でそれ以前からの伝統を汲む基壇型の神殿は建設されなくなつたが、ペルー北部高地カハマルカ地方は例外である。形成期末期は神殿を中心として社会が統合された形成期から次のより政治的に社会統合がなされた地方発展期への移行期である。またロウの編年ではこの形成期末期は前期中間期の始まりに対応し、新しい時代の初めの部分と理解されていたが（Rowe & Menzel [eds.] 1967）、近年では前期ホライズンの終わりに対応するパラカス後期が形成期末期と部分的に重なると考えられている（Reindel & Isla 2015; Unkel *et al.* 2012）。

⁷ ペルー北海岸はワルメイ川以北、中央海岸はカニエテ川以北フォルタレサ川以南、南海岸はカニエテ川よりも南を大まかに指す（図 1）。ペルー北高地、中央高地、南高地はそれぞれ北海岸、中央海岸、南海岸の東方向の山地に対応する。

こうした連続性は中央アンデス北部の他の地域では確認されていない。

海岸地帯の多くの地域では神殿建設がストップしたのが山地よりも早く、前 800 年頃のことである。それをリチャード・バーガーは「海岸における危機 (Crisis on the coast)」と表現し (Burger 1992)、大貫良夫は「海岸空白 (*Blanco Costeño*)」という概念で説明した (Onuki 1993)。前 800 年頃に多くの神殿が放棄され、ある神殿が建設途中であったという証拠もある。人々がどこかへ行ってしまったのであろうか。あるいは神殿建設をストップしたが、人々はそこに住み続けたのだろうか。おそらく後者の解釈がより整合性があるであろう。例えば、ペルー北海岸南部のカスマ谷では、この時期に大規模な遺跡が確認されているが、いずれも基壇型、ピラミッド型の建築物が欠如している (Pozorski & Pozorski 1987)。またカスマ谷よりも北のネペーニャ谷でも同様に大規模な遺跡が確認されている (Chicoine & Ikehara 2014)。

重要なのは、こうした神殿建設を早々とやめたペルー北海岸や中央海岸において、その数百年後地方発展期に、初期国家、あるいはそれに準ずる中央集権的社会が成立したということである。後 1 世紀頃⁸に成立したペルー北海岸のモチェ社会や、中央海岸のリマ社会がその例である。ただし神殿建設の中止と、その後の国家の成立の間にはおよそ 800 年以上の期間があり、神殿建設の終焉後、すぐに国家が成立したわけではない。

一方、例えば山地のチャビン・デ・ワントル (Burger 1992; Rick *et al.* 2010)、パコパンパ (Seki 2014; Seki *et al.* 2010)、クントウル・ワシ (Inokuchi 2014; Kato 2014; Onuki [ed.] 1995; Onuki & Inokuchi 2011) といった大神殿が形成期後期に建設、更新され続けた地域、そして海岸のネペーニャ谷などは、儀礼的紐帯の強かった地域と考えられるが、そうした地域においてはその後、国家と呼ばれる社会は成立しなかった。他の地域を中心として勃興した国家に併呑されることはあったが、在地の一次国家は成立しなかったのである。さらにカハマルカは形成期末期まで基壇型の神殿を建設し続けた地域であるが、そこでは形成期の後の地方発展期に儀礼的紐帯の強い分節社会、無頭型社会に類似したカハマルカ社会が生まれ、スペイン人が侵入する 16 世紀までおよそ 1600 年間にわたり長期間続いた (Watanabe 2009)。

以上を踏まえると、形成期の儀礼的紐帯と、地方発展期以降の政治的結合の間には、相対的に反比例の相関が認められる、と整理できるであろう (渡部 2010; Watanabe 2015)。つまり神殿社会が早い時期に崩壊したことが、次の国家社会の前提となっていると見ることができる⁹。また、儀礼的紐帯の強い形成期の神殿社会やカハマルカ社会などは長期間続き、政治的統合体である国家や帝国は比較的短い期間で崩壊する、あるいは入れ替わるといった点も指摘できる。次に、国家の崩壊について考えてみたい。

5. アンデスの国家の成立と終焉

⁸ モチェ文化の始まりは後 1 世紀頃であるが、国家としてのまとまりが出てきたのはもっと後の時期であるとする研究者もいる (Shimada 1994)。

⁹ スーペ、パティビルカ、フォルタレサといった河川流域では形成期早期に神殿が集中的に建設されたが、それらの神殿の多くは形成期早期の終わり、あるいは形成期前期の初めに放棄され、その後同地域に大規模な神殿や、あるいは複雑な社会は成立しなかった。形成期中期に神殿が建設され、その後に中央集権的社会が成立した地域と比較し、社会変化の条件の違いを考察する必要がある。

神殿社会の崩壊は、長期的に見ると国家社会の成立と連動しているが、それはスムーズに接合していないことに注意する必要がある。つまり神官が権力を握って王になった訳ではない。逆に神官を中心とした社会が崩壊し、そして同じ場所でかなりの時間がたって国家が成立したのである。その時間が人口増加などの条件を満たすのに必要だったのか、あるいは山地で神殿社会がまだ機能していた時期には、海岸地帯においても神殿社会の拘束性が残存しており、新しい社会が生まれにくかったという説明も可能かもしれない。国家成立のメカニズムを理解する手がかりを得るためには、形成期後期に海岸地帯がどのような状況にあったのかを説明する必要がある。例えば、海岸では少なくとも従来の基壇型の神殿を作っていた社会（ランバイエケ谷、ネペーニャ谷）と、より水平方向に拡張する別のタイプの神殿、あるいは神殿とは異なった性格の大規模建築を有する社会（カスマ谷、ネペーニャ谷）が併存していたことから、複雑性の度合いが高かったという点を指摘できる（*cf.* Shibata 2014）。

国家の成立の背景を押さえ、国家の特質を理解するためには政治的側面と儀礼的側面を分析の手続きとして分け、両者の関係を考察するのが有効であろう。例えば、同じ人物が神官と王を兼ねる場合と、別々の場合では、両者の関係は異なり、後者の方がより複雑であると言える。先スペイン期最後に登場したインカ帝国では、征服を行った王と、神官は別々の役職であったが、初期のモチエ国家では王と神官が分離していた証拠は明らかではない。儀礼的紐帯と政治的結合の相関関係に注目することがアンデス諸社会を捉えるのに有効であろう。

次に国家、帝国の崩壊、終わりと、「再生」の関係について考えてみたい。

中央アンデス北部のペルー北海岸のモチエ川を中心にモチエ国家が地方発展期に成立したことを述べた。その後、ペルー北海岸は後 8 世紀頃南高地のワリ帝国の支配下に入り、モチエ国家は終焉を迎え、その後ワリの影響下でラ・レチェ川を中心にシカン王国が発展した。シカン前期（後 850-950 年）はワリ帝国期と平行期であり、その後のシカン中期（後 950-1100 年）に全盛期を迎えた。後 1200 年頃からモチエ川流域のチャンチャンを首都としたチムー王国が発展し、後 1320 年頃にはヘケテペケ川流域まで支配下に治め、その後、後 1375 年頃にはシカン王国の中心であるランバイエケ川流域を支配下に治めた。それがシカン後期（後 1100-1375 年）の終わりに対応する。しかしチムー王国もその後、後 1470 年頃、ペルー南高地クスコを首都とするインカ帝国に併呑された。ペルー北海岸における国家の盛衰は、一地域において諸王国が連続的に交代するという意味で、中国の諸王朝と類似している。

一方で、ペルー南部、ボリビアにおける展開はやや異なっている。それはアンデス全域の編年の枠組みの基礎となるホライズン現象と連動している。

前期ホライズン前半（前 800-500 年）の現象はチャビン・ホライズンと呼ばれるが、その相互交流領域にペルー南部の地域が組み込まれた（*cf.* Matsumoto 2010）。ペルー南海岸などはそれ以前に神殿建設があまり活発でなかった地域であるが、前 800 年以降にチャビン文化と共通の特徴を有するパラカス文化が繁栄した。そしてチャビン・ホライズンの終わりに対応する前 500 年頃よりも後の時代には、ペルー南部高地では社会的まとまりがあまりはっきりしない。そしてその後、前 200 年-後 200 年頃には、ティティカカ湖北西地域

を中心にプカラ文化が繁栄したのであるが、それは特定の遺跡のみが肥大化しているという意味で、神殿社会と類似している。つまり、国家社会に想定される遺跡間のヒエラルキーが、少なくとも明確な形では認められない。そしてその後、後 200-600 年頃には小規模な社会（政体）が林立する。社会の形態はよく分からないが、この時期の社会を国家と見なすような証拠はなく、分節制社会と説明される（Stanish 2003）。

後 600-1000 年にはボリビアのティティカカ湖畔のティアワナコ遺跡を中心としたティワナク、ペルー中央高地南部のワリ遺跡を中心としたワリという 2 つの国が成立し、特に後者はインカ帝国の祖型といわれる。しかし両者ともその後、崩壊してしまうが、他の国に征服された訳ではない。ワリとティワナクの崩壊は、主に内的要因による。つまり常に他の国の勃興と、それによる征服という外的要因で崩壊する、ペルー北部海岸の諸社会とは異なった崩壊のメカニズムである。ワリ帝国が最後まで拡張傾向にあったことは確かであり、例えばペルー北高地に位置するワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオ遺跡では、最終期に大量の労働力が投入され、建設活動が拡大したことが判明している（渡部 2014; Watanabe 2011, 2014, 2016）。そしてワリとティワナクの崩壊後、後 1000-1400 年には、山地においては小規模社会が乱立し、その後最終的にインカ帝国の成立を迎えることになる。

まとめると、ペルー南部とボリビアでは、中央集権的社会が登場する時代と、そうではない時代が交互に繰り返し現れるのである。筆者はこの現象を説明するために振り子モデルを提唱した（渡部 2010; Watanabe 2015）。それは振幅を増大させていく振り子であり、あるいは中心から周辺に向かう螺旋運動を横から見た動きとも表現できよう。

6. 振り子モデル

1991 年にアメリカ考古学の重鎮ゴードン・ウィリーは、ホライズン現象と、そうでない時期の繰り返しに何か意味があるのではないかと、いうことを述べた（Willey 1991）。その問題提起を受け、もう少し、振り子モデルを整理してみよう。

社会人類学者エドモンド・リーチは、ビルマのカチンを対象として、 Gumsa、Gumrao という二つの社会形態を行ったり来たりする歴史的様相をつまびらかにした（リーチ 1995[1954]）。アンデスの事例もそれと類似している。カチンよりも規模は大きく、さらに、複数の民族集団を包摂する動きといえる。

中米研究者のジョイス・マーカスは、国家の成立や台頭、そして崩壊という現象を長いタイムスパンで一連のものとして考えるモデルを提唱した（Marcus 1993, 1998）。それは「動態モデル」と呼ばれる。マーカスのモデルはマヤという言語系統を同じくした人々の間で、諸王朝が盛衰する現象を説明するモデルである。さらに、マーカスはアンデスにも動態モデルを応用して実験的に考察している（Marcus 1998）。

政体の盛衰を一連の流れとして捉えることは議論の大枠として正しいが、中央アンデス南部における社会の移り変わりには違うリズムが認められる。マヤの事例は、中央集権の度合いを変化させながら、センター間の関係が移り変わっていくことを示しているが、アンデスでは、中央集権的社会と非中央集権的社会が交互に出てくる。その動きを振り子に譬えれば、次第に振幅を増大させていく振り子といえる。ワリ帝国やインカ帝国は、初期

よりも後期のほうがより規模が大きくなり、常に拡大の指向性を有し、決して安定期には達しない。むしろ飽和状態になる、あるいは限界を超えるまで拡張が進行すると説明できる。

こうした現象が起こる前提など、考えるべき問題は多い (cf. 渡部 2010)。しかしここでは、崩壊は次の大規模社会が生じるための必要条件であったということに注目したい。換言すれば、社会の先行形態に制約されない方が、新しい、大規模社会が生まれやすいのである。これはペルー北海岸や中国の王朝の連続的発展とは大きく異なっている。つまり、崩壊はある時代の終わりであると同時に、次の始まりでもあるのである。

また、アンデス南部において政体が盛衰を繰り返すのに伴い、文化の断絶が認められるかという点とそうではない。文化的連続性はむしろ顕著である。インカのモデルによって、先インカ期の諸社会を記述することがしばしば行われるが、それは多くの研究者が直感的にその妥当性を認めているからであり、文化的連続性が実際に認められるからである。一般的に、社会が連続的に発展した方が、文化の継承もスムーズにいくと考えられるが、アンデスの場合はそうではなく、ついたり消えたりする電気のように、文化の連続性が再帰的に認められるのである。アンデス文化の特徴として例えば、両手に長いものを持った人物などの図像様式、壁龕や水路を伴う建築様式、鐙形土器やコップ形土器などの土器様式、そして四分制や三分制などを基にした構造などを挙げることができる。それはある文化伝統が、他者との対峙の中で創造されるということではない。

アンデスの事例では、焦点を絞れば確かに国家などの崩壊と呼べる現象はあるが、こうした複雑社会は数百年の後、再生するのである。またそれに伴いアンデスの文化伝統は再帰的に復活する。そのため短期的現象を長期的コンテクストの中に位置づけ分析することが重要である。

7. 結語

一人の人間が生きて知覚できる時間幅はわずかであるが、考古学ではより長期にわたる現象を観察していると言える。それは、ブローデルの言葉を借りれば、構造的な時間と説明できるかもしれない。「崩壊」と「再生」を論じるに当たり、重要なのはどのような時間の物差しで測るかである。焦点を絞れば崩壊と呼べる現象も、長期的に見ると、次のステージの前段階となる場合がある。アンデス地域などにおいて振り子現象が起きる前提、それを担保する条件は何か。それは、生物学の断続平衡モデルとも異なる。一方で、そのような現象ではなく、消え去ってしまい、なにも復活しない場合もあり、そうした事例との比較も今後の課題として残されている。

近年考古学では、各地の社会展開を「歴史性」あるいは「リズム」という言葉で表現し、個別性を強調する傾向が強い。アンデスの事例では、儀礼的紐帯が強く、政治的階層性のあまりはつきりしない社会は長期間継続し、政治的結合による中央集権的社会は逆に短期間しか存続しない(渡部 2013; Watanabe 2015)。前者の例は例えばカハマルカ社会であり、そして後者はワリヤインカである。こうした点も踏まえて個別事例から複雑社会の複雑性をより精緻に分析し、複雑社会の崩壊をモデル化する必要がある。

謝辞 芝田幸一郎氏から本論文に対しきわめて建設的なコメントをいただいた。記して感謝申し上げたい。本稿は南山大学 2015 年度パツへ研究奨励金 I-A-2 による研究成果である。



図 1 本論文で言及する遺跡、河川、都市 (▲遺跡、●現在の都市)

引用文献

Alva Meneses, Ignacio

2010 Los complejos de Cerro Ventarrón y Collud-Zarpán: del Precerámico al Formativo en el valle de Lambayuque, *Boletín de Arqueología PUCP* 12[2008]: 97-117.

2012 *Ventarrón y Collud: origen y auge de la civilización en la costa norte del Perú*. Lima: Ministerio de Cultura del Perú.

Beck, Robin A., Jr., Douglas J. Bolender, James A. Brown & Timothy K. Earle

2007 Eventful Archaeology: The Place of Space in Structural Transformation, *Current Anthropology* 48(6): 833-860.

Burger, Richard L.

1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. London: Thames & Hudson.

2012 Central Andean Language Expansion and the Chavín Sphere of Interaction. In P. Heggarty & D. Beresford-Jones (eds.), *Archaeology and Language in the Andes: A Cross-Disciplinary Exploration of Prehistory*, pp.135-161. Oxford: The British Academy & Oxford University Press.

Carneiro, Robert L.

1970 A Theory of the Origin of the State, *Science* 169: 733-738.

Chicoine, David & Hugo Ikehara

2014 Ancient Urban Life at the Early Horizon Center of Caylán, Peru, *Journal of Field Archaeology* 39(4): 336-352.

Conkey, Margaret W.

1990 Experimenting with Style in Archaeology: Some Historical and Theoretical Issues. In M. W. Conkey & C. A. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, pp.5-17. Cambridge: Cambridge University Press.

Diamond, Jared M. (ジャレド・ダイヤモンド)

2012[2005] 『文明崩壊 : 滅亡と存続の命運を分けるもの』(楡井浩一訳) . 東京: 草思社.

Dietler, Michael & Ingrid Herbich

1998 Habitus, Techniques, Style: An Integrated Approach to the Social Understanding of Material Culture and Boundaries. In M. T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, pp.232-263. Washington: Smithsonian Institution Press.

Eisenstadt, Shmuel N.

1988 Beyond Collapse. In N. Yoffee & G. L. Cowgill (eds.), *The Collapse of Ancient States and Civilizations*, pp.236-243. Tucson: The University of Arizona Press.

Faulseit, Ronald K. (ed.)

2016 *Beyond Collapse: Archaeological Perspectives on Resilience, Revitalization, and Transformation in Complex Societies*. Occasional Paper No.42.

Carbondale: Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University, Southern Illinois University Press.

Faulseit, Ronald K.

- 2016 Collapse, Resilience, and Transformation in Complex Societies: Modeling Trends and Understanding Diversity. In R. K. Faulseit (ed.), *Beyond Collapse: Archaeological Perspectives on Resilience, Revitalization, and Transformation in Complex Societies*, pp.3-26. Occasional Paper No.42. Carbondale: Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University, Southern Illinois University Press.

Hegmon, Michelle

- 1992 Archaeological Research on Style, *Annual Review of Anthropology* 21: 517-536.

Hegmon, Michelle

- 1998 Technology, Style, and Social Practices: Archaeological Approaches. In M. T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, pp.264-279. Washington: Smithsonian Institution Press.

Inokuchi, Kinya

- 2014 Cronología del Período Formativo de la sierra norte del Perú: una reconsideración desde el punto de vista de la cronología local de Kuntur Wasi. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, pp.123-158. Senri Ethnological Studies 89. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Kato, Yasutake (加藤泰建)

- 1993 「アンデス形成期の祭祀建築」, 『民族藝術』 9: 37-48.
- 2014 Kuntur Wasi: un centro ceremonial del Período Formativo Tardío. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, pp.159-174. Senri Ethnological Studies 89. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Kato, Yasutake & Yuji Seki

- 1985 Excavations at Layzon. In K. Terada & Y. Onuki (eds.), *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzon, 1982*, pp.183-264. Report 3 of the Japanese Scientific Expedition to Nuclear America. Tokyo: University of Tokyo Press.

加藤泰建・関雄二 (編)

- 1998 『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会—』. 東京: 角川書店.

Keck, Markus & Patrick Sakdapolrak

- 2013 What Is Social Resilience?: Lessons Learned and Ways Forward, *Erdkunde* 67(1): 5-19.

Leach, Edmund Ronald (エドモンド・R・リーチ)

- 1995[1954] 『高地ビルマの政治体系』(関本照夫訳). 東京: 弘文堂.

Lumbreras, Luis Guillermo (ルイス・ルンブレラス)

1977[1974] 『アンデス文明—石期からインカ帝国まで—』(増田義郎訳). 東京: 岩波書店.

Marcus, Joyce

1993 Ancient Maya Political Organization. In J. A. Sabloff & J. S. Henderson (eds.), *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.*, pp.111-183. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library & Collection.

1998 The Peaks and Valleys of Ancient States: An Extension of the Dynamic Model. In G. M. Feinman & J. Marcus (eds.), *Archaic States*, pp.59-94. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press.

Matsumoto, Yuichi

2010 *The Prehistoric Ceremonial Center of Campanayuc Rumi: Interregional Interactions in the South-central Highlands of Peru*, Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, Yale University.

McAnany, Patricia A. & Norman Yoffee (eds.)

2010 *Questioning Collapse: Human Resilience, Ecological Vulnerability, and the Aftermath of Empire*. Cambridge: Cambridge University Press.

Onuki, Yoshio

1993 Las actividades ceremoniales tempranas en la cuenca del Alto Huallaga y algunos problemas generales. In L. Millones & Y. Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino*, pp.69-96. Senri Ethnological Studies No. 37. Osaka: National Museum of Ethnology.

Onuki, Yoshio (ed.)

1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Tokio: Hokusen-Sha.

Onuki, Yoshio & Kinya Inokuchi

2011 *Gemelos Prístinos: El Tesoro del Templo de Kuntur Wasi*. Lima: Fondo Editorial del Congreso del Perú & Minera Yanacocha.

Pozorski, Shelia & Thomas Pozorski

1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. Iowa City: University of Iowa Press.

Reindel, Markus & Johny Isla

2015 Jauranga: una aproximación a la ocupación paracas en los valles de Palpa, *Boletín de Arqueología PUCP* 17[2013]: 231-262.

Rick, John W., Christian Mesia, Daniel Contreras, Silvia R. Kembel, Rosa M. Rick, Matthew Sayre & John Wolf

2010 La cronología de Chavín de Huántar y sus implicancias para el Periodo Formativo, *Boletín de Arqueología PUCP* 13[2009]: 87-132.

Rowe, John Howland & Dorothy Menzal (eds.)

1967 *Peruvian Archaeology: Selected Readings*. Palo Alto: Peek Publications.

Schwartz, Glenn M.

2006 From Collapse to Regeneration. In G. M. Schwartz & J. J. Nichols (eds.), *After Collapse: The Regeneration of Complex Societies*, pp.3-17. Tucson: The University of Arizona Press.

Schwartz, Glenn M. & John J. Nichols (eds.)

2006 *After Collapse: The Regeneration of Complex Societies*. Tucson: The University of Arizona Press.

Seki, Yuji (関雄二)

2010[1997] 『アンデスの考古学 (改訂版)』. 東京: 同成社.

2014 La diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo: Una perspectiva desde la sierra norte. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, pp.175-200. Senri Ethnological Studies 89. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Seki, Yuji, Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai, Diana Alemán, Mauro Ordóñez, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi & Daniel Morales

2010 Nuevas evidencias del sitio arqueológico de Pacopampa, en la sierra norte del Perú, *Boletín de Arqueología PUCP* 12[2008]: 69-95.

Shibata, Koichiro

2010 Cerro Blanco de Nepeña dentro de la dinámica interactiva del Período Formativo, *Boletín de Arqueología PUCP* 12[2008]: 287-315.

2011 Cronología, relaciones interregionales y organización social en el Formativo: esencia y perspectiva del valle bajo de Nepeña. In M. Giersz & I. Ghezzi (eds.), *Arqueología de la Costa de Ancash*, pp.113-134. Andes: Beletín del Centro de Estudios Precolombinos de la Universidad de Varsovia, N°. 8. Varsovia-Lima: Centro de Estudios Precolombinos, Instituto Francés de Estudios Andinos.

2014 Centro de "Reorganización costeña" durante el Período Formativo Tardío: Un ensayo sobre la competencia faccional en el valle bajo de Nepeña, costa nor-central peruana. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, pp.245-260. Senri Ethnological Studies 89. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Shimada, Izumi

1994 *Pampa Grande and the Mochica Culture*. Austin: University of Texas Press.

Stanish, Charles

2003 *Ancient Titicaca: The Evolution of Complex Society in Southern Peru and Northern Bolivia*. Berkeley: University of California Press.

Stark, Miriam T.

1998 Technical Choices and Social Boundaries in Material Culture Patterning: An Introduction. In M. T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, pp.1-11. Washington: Smithsonian Institution Press.

Tainter, Joseph A.

- 1988 *The Collapse of Complex Societies*. New Studies in Archaeology. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2016 Why Collapse Is So Difficult to Understand. In R. K. Faulseit (ed.), *Beyond Collapse: Archaeological Perspectives on Resilience, Revitalization, and Transformation in Complex Societies*, pp.27-39. Occasional Paper No.42. Carbondale: Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University, Southern Illinois University Press.

Unkel, Ingmar & Bernd Kromer

- 2009 The Clock in the Corn Cob: On the Development of a Chronology of the Paracas and Nasca Period Based on Radiocarbon Dating. In M. Reindel & G. A. Wagner (eds.), *New Technologies for Archaeology*, Natural Science in Archaeology. Berlin/Heidelberg: Springer-Verlag.

Unkel, Ingmar, Bernd Kromer, Markus Reindel, Lukas Wacker & Günther Wagner

- 2007 A Chronology of the Pre-Columbian Paracas and Nasca Cultures in South Peru Based on AMS 14C Dating, *Radiocarbon* 49(2): 551-564.

Unkel, Ingmar, Markus Reindel, H. Gorbahn, Johny Isla, Bernd Kromer & V. Sossna

- 2012 A comprehensive Numerical Chronology for the pre-Columbian Cultures of the Palpa Valleys, South Coast of Peru, *Journal of Archaeological Science* 39: 2294-2303.

Watanabe, Shinya (渡部森哉)

- 2009 La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(2): 205-235.
- 2010 『インカ帝国の成立—先スペイン期アンデスの社会動態と構造』. 南山大学学術叢書. 横浜: 春風社.
- 2011 Continuidad cultural y elementos foráneos en Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio, *Boletín de Arqueología PUCP* 14[2010]: 221-238.
- 2013 「アンデス文明形成期の神殿社会」, 『人類学研究所研究論集』 1: 33-52.
- 2014 Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca, *Boletín de Arqueología PUCP* 16[2012]: 105-129.
- 2014 「ワリ帝国の行政センターと地方統治—ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」, 『古代アメリカ』 17: 25-52.
- 2015 *Dominio provincial en el Imperio inca*. Yokohama: Editorial Shumpusha.
- 2016 Cronología y dinámica social durante el período Wari: nuevos descubrimientos en el sitio arqueológico El Palacio, sierra norte del Perú. In M. Giersz & K. Makowski (eds.), *Nuevas Perspectivas en la Organización Política Huari*, pp.263-285. Andes: Boletín del Centro de Estudios Precolombinos de la

Universidad de Varsovia No 9. Varsovia-Lima: Centro de Estudios Precolombinos / Instituto Francés de Estudios Andinos.

Willey, Gordon R.

1991 Horizontal Integration and Regional Diversity: An Alternating Process in the Rise of Civilization, *American Antiquity* 56(2): 197-215.

Yoffee, Norman

1988 Orienting Collapse. In N. Yoffee & G. L. Cowgill (eds.), *The Collapse of Ancient States and Civilizations*, pp.1-19. Tucson: The University of Arizona Press.

2006 Notes on Regeneration. In G. M. Schwartz & J. J. Nichols (eds.), *After Collapse: The Regeneration of Complex Societies*, pp.222-227. Tucson: The University of Arizona Press.

Yoffee, Norman & George L. Cowgill (eds.)

1988 *The Collapse of Ancient States and Civilizations*. Tucson: The University of Arizona Press.

Keywords

collapse, regeneration, complex society, state, Andes